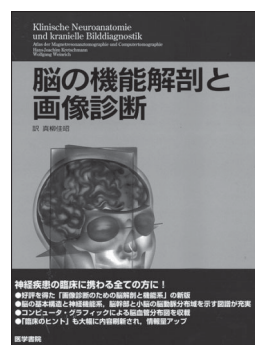


真柳 佳昭●訳

『脳の機能解剖と画像診断』

書評者

中野 今治（自治医科大学教授・神経内科学）



本書は『脳の機能解剖と画像診断』と命名されている。脳の図譜とそれに対応する脳画像（主としてMRI）が見開き2ページで見やすく提示されている。

しかし、本書は画像診断のための単なるアトラスではない。「最新の画像診断機器は患者にとって不利益ともなり、危険ともなりうる」(p1)。その通りである。このような記載は脳画像の他書にはみられない。「画像診断によって一目瞭然な病的所見が、いつも臨床症状を起こしている原因とは限らない。画像上の病理所見と臨床症状とを関連づけるには、機能局在に関する神経解剖学の知識が必要である」(p1)。全面的に賛成である。本書は画像の書であるが、神経学の基本的考えで裏打ちされている希有な書である。

とはいえ、本書の命はやはり脳の局所解剖図譜にあると思う。しかも、その図譜が、取り出された脳を元にしたのではなく、生前の形態が保存される *in situ* 固定脳標本を用い、定位脳手術などで用いられる直行座標軸や座標枠にのっとった切面にしたがって作成されたという点に本書の真骨頂があると思う。

第8章「研究資料と研究方法」を読むと、本書の図譜が実に丁寧に作成さ

れたものであることがわかる。本書には4シリーズ（前額断、矢状断、外眼角耳孔面、脳幹）の脳図譜が納められている。図譜作成のために献体された4個体をそれぞれのシリーズ作成に用いている。まず全身固定した後にマイナス26℃で6日間凍結し、帯鋸を用いて脳を含む10mm厚さ（脳幹シリーズは5mm厚さ）の頭部切片を作成、次に各切片の等倍撮影写真上にセロファン紙を置き、常に実物切片を参照しながらトレースして仕上げられたものである。

脳切（brain cutting）後に脳回を同定することは至難の業である。Brain cutting では、切面での同定が必要な脳回には墨汁等であらかじめマークを付け、それを頼りに切面での同定を行う。本書の図譜ではこれはもちろん使えない。著者は「大脳半球の個々の回と脳溝は、大脳の1:1のモデルを作り、合成樹脂板で再構築し、また他のいくつかの脳と頭部の連続切片標本とを比較することによって、初めて命名」している。また、各動脈の同定も本書の手法の限界をわきまえて標本に忠実に実行されており、推測で記入・命名するようなことはせず、信頼できる図譜となっている。

このように精緻に作成された図譜の

上に記入された機能画像は、われわれ神経疾患診療に携わる者に実に貴重な知識を与えてくれる。例えば、図145⑤-⑬、146⑦-⑪に示されたBroca野、Wernicke野、角回、弓状束の関係は失語症とその病巣を考える上で得がたい画像である。角回は前額断では信じがたいほど後方に位置しているのに驚かされる。

訳者は脳の解剖と機能に精通した脳神経外科医真柳 佳昭氏である。訳は滑らかで読みやすい。氏の文章力と脳神経外科医としての実力に基づくものであり、最適の訳者を得たと思われる。訳者序で触れている本書初版、第2版の共訳者、故 久留 裕先生は世界的な神経放射線科医であり、私にも学生の頃から多くのことをじかに教えて下さった方である。

本書は久留先生がおっしゃったように「誰かが書くべき本」である。日々神経疾患患者を診、脳画像を観るわれわれにとって座右に備え、常に紐解くべき書と言える。

A4変型 頁484 2008年 医学書院刊
定価21,000円（本体20,000円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00047-5]